

第78回日本医学放射線学会総会 印象記

長田 直也
Osada Naoya

1. 学会の概要

第78回日本医学放射線学会総会（JRS）は、熊本大学教授の山下康行会長のもと、2019年4月11～14日の4日間、パシフィコ横浜にて、第75回日本放射線技術学会総会学術大会、第117回日本医学物理学会学術大会及び国際医用画像総合展（ITEM 2019）との合同で、JRC 2019として開催されました（写真1～4）。開催期間直前の4月の第2週前半は、関東地方は冬に逆戻りしたかのような寒さや雷雨、山間部では季節外れの降雪もあり、筆者も天候を心配していましたが、開催期間中は大きな天候の崩れもなく終わりました。昨年から、専門医機構による新専門医制度が本格的にはじまり、専門医の更新に学会での単位認定が必要になったこともあり、講演開始前後には会場前に単位登録のための長蛇の列ができ、以前の学会と比べてもかなりの参加者がいたと思われます（写真5）。必然的に単位が取得できる講演に聴講者が殺到することになり、とある講演の演者の先生が、「今学会は会場が殺気立っている。興味のある講演をゆったりと聴ける本来の学会の姿に戻ってほしい」と仰っていたのが印象的でした。

今回のJRSは、革新的な放射線医学を一患者に寄り添って一というテーマで、画像診断やIVR、放射線治療等の放射線医学が現在に至るまで大きく発展してきたように、今後の放射線医学が発展していくためには、放射線科医が革新的でなければならないという思いと、放射線医学の発展の最終的な目標は「患者さんのためなる」ということを再認識するという意味が込められているようでした。教育講演、

シンポジウム、国際交流セッション、特別講演等に加えて、一般演題・電子ポスター発表等、例年どおり、数多くの講演・演題があり、筆者は教育講演や合同教育セッション、特別企画等を聴講しました。時間の都合上、仕方のないことですが、聴講したい



写真1 会場入り口の様子



写真2 JRC及びITEMのポスター



写真3 メインホール入り口の様子



写真4 ITEM会場入り口の様子

講演が同時刻に重なってしまっていることもあり、その点は残念な部分でもありました。

昨年の同学会でもそうでしたが、近年の放射線医学のトピックとなっている人工知能についての講演やシンポジウムが数多くあり、筆者が聴講した講演はいずれも会場から人があふれ、立ち見が出るほどの盛況ぶりでした。また、合同開会式での各大会長の基調講演でも人工知能についての言及があり、学会員の人工知能への関心の高さがうかがえました。

2. 人工知能に関する講演について

前述したように、人工知能については今学会のトピックの1つであり、開会式後の松尾豊先生（東京大学）の合同特別講演をはじめ、連日、関連する講演が開催されていました。合同特別講演では、人工知能についての基礎的な内容から、医療への活用への講演がありました。特に医療画像の分野は人工知能との親和性が高い上に、社会的な需要も大きいことから、全産業分野において、開発がもっとも速く進んでいるとのことでした。ただし、医療における総合的な判断は人工知能にはできない、人の優れた能力であるとの言及もあり、医療者の人工知能への正しい理解や活用が必須であると改めて感じました。

筆者はその他にも、人工知能関連の特別企画をいくつか聴講しました。内容としては、ナショナルデー



写真5 大混雑の会場内の様子

タベースの構築により、画像診断への人工知能の応用を放射線科医が率先して牽引していく必要があることや、診断だけでなく、検査の適正化や被ばく管理への応用も期待できるとのことでした。また、レポートシステムへの組み込みは開発がまだ進んでおらず、放射線科医の業務への実務的な活用にはまだ課題も多く残っているとのことでした。

今学会の印象としては、放射線科医の人工知能への関心の高まりを感じ、また、専門医制度の変化による学会参加の目的まで変わってきている（変わってきてしまっている）ことを感じた学会となりました。

（千葉県がんセンター 画像診断部）